

東南アジア途上国における個人の価値観が生活行動へ与える影響の考察

山田 凌¹・鈴木 美緒²・屋井 鉄雄³

¹正会員 東京都水道局東部建設事務所（〒125-0043 東京都葛飾区金町浄水場1）
E-mail: yamada-ryo@waterworks.metro.tokyo.jp

²正会員 東京工業大学助教 総合理工学研究科（〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259）
E-mail:mios@enveng.titech.ac.jp

³正会員 東京工業大学教授 総合理工学研究科（〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259）
E-mail:tyai@enveng.titech.ac.jp

開発途上国では、地域、国特有の価値観に起因する特徴的な生活行動が発生しており、その中には先進国で見られないようなものが多々存在する。これらの生活行動は交通利用に大きな影響を与えると考えられ、今後、環境に優しい交通モードを普及させる際の利用促進や需要予測を効果的に行うためにも、価値観が生活行動に与える影響を把握しておく必要があると考えられる。そこで本研究では、東南アジア開発途上国を対象とし、価値観が生活行動に与える影響を把握し、お金ではなく技術力の向上や人間的な暮らしへの憧れ、集団志向という一定の傾向を見ることができた。

Key Words : Southeast Asia, Values, Daily Activities

1. 本研究の背景と目的

近年、東南アジア諸国では経済発展に伴い、車両保有率が増加傾向にある。また、大気汚染や渋滞等の問題も発生しており、かつての先進国と同様の道筋を辿っている。現状では公共交通のシェアが大きい後発開発途上国や開発途上国の中堅都市でも、自動車やオートバイへのシフトが発生する可能性があり、これらを未然に防ぐための施策が必要だといえる。

また、東南アジアでは特殊な生活行動がしばしば見受けられる。例えば、カンボジアでは昼飯時に家族で食事をするために自宅に帰宅する、ベトナムでは早朝のお祈りのあと、通勤までの空き時間に買い物を行うといったものである。そして、こうした行動の一要因として居住環境や経済状況はもちろん、個人の価値観が与える影響も無視できないものであると考えられる。さらに、近年はインターネットや携帯電話の普及に伴い価値観が多様化しており、価値観の変化に起因して普段の生活や行動に変化が起きている可能性もある。そして、その実態を把握しておくことが、今後の途上国での生活行動および交通行動を考える上で重要なことだと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では東南アジアの開発途上国を対象とした既存の調査や統計を組み合わせることで、価

値観・意識と生活行動との関係を把握し、その中から東南アジア特有のものを抽出することを目的とする。

2. 既往研究と本研究の位置付け

価値観と生活行動の関係について把握した研究はこれまでに数多く存在する¹⁾。だが、これらは先進国を対象としたものが多く、途上国を対象としているものは少ない。マーケティング分野では東南アジアを対象とした調査も存在する²⁾が、調査の対象とする行動が消費行動に限定されている。また、国際比較という点では、行動に関する調査として例えば生活時間調査が行われているが、国際的な調査体系の統一には至っておらず、生活行動の国際比較は一部の国に限られている³⁾。

そこで本研究では、交通行動データそのものも多くなると考えられる東南アジアの開発途上国を対象として、将来的に公共交通の導入が検討される際に配慮すべき価値観や生活行動の抽出に資する知見を得ることを目的とする。

3. 東南アジア固有の価値観の概要

まず、東南アジアにおける価値観の実態について、

表-1 各種価値観データの概要

調査名	World Values Survey (WVS)	Hofstede's cultural dimensions	GLOBE study (GLOBE指標)	アジアバロメータ
種別	アンケート	指標	指標	アンケート
年	2009	1990-2008	2004	2004
対象国数	57	70	57	29
東南アジア対象国数	4	6	5	10
各国のサンプル数	954~2701	—	総計17000	800
設定する変数	234	6	18	99

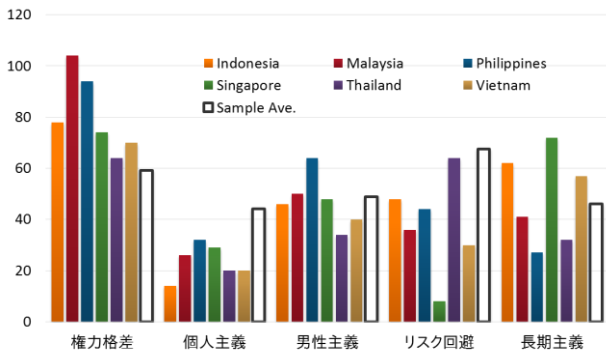


図-1 Hofstede指標値の比較

表-1に示す4種類の価値観調査データから把握する。このうち、Hofstede's Cultural Dimensions Theory (以下Hofstede指標)とGLOBE Study (以下GLOBE指標)は複数のアンケート調査を基に各国の国民性を指標化したものであり、本研究ではその指標をそのまま使用する。一方で、World Values Survey (以下WVS)及びアジアバロメータは、価値観に関するアンケートであり、本研究では集計後のデータを扱う。

各データから、以下の傾向が見て取れた。

- Hofstede指標の東南アジア各国 (インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム)

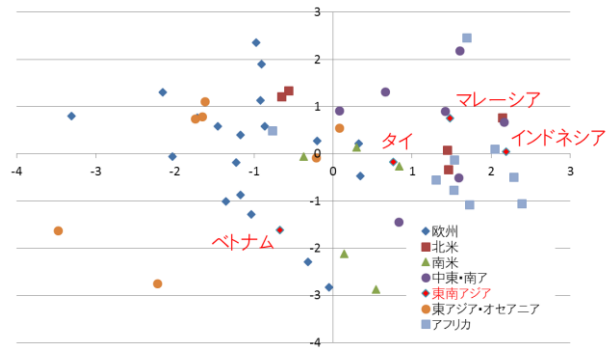


図-3 WVSデータによる主成分分析 (n=56)

と調査対象国の平均値を比較した際には、平均と比べると、権力格差の値が低く、個人主義、リスク回避の値が高い傾向があり、有意水準1%のもとで有意差がみられた。つまり、東南アジア全体として、権力格差が大きい一方で、リスク志向かつ集団主義的であることがわかった。

- GLOBE指標からは、現状として、東南アジア各国 (インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ)は調査対象国全体の平均よりも、集団主義や他者への思いやりが高い傾向が見られた反面、理想として、自己主張、リスク回避を掲げる傾向があることがわかった。ただし、タイだけは他の東南アジア諸国とは傾向が異なることが見て取れる (図-2)。

- WVSからは、東南アジア各国 (インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム)が、「安定した経済」を最も重視し、「独立や節約」を子供に身に付けさせたいと考える傾向が強いことがわかった。逆に、「お金よりアイデアが大事」という価値観や、子供に「他者への尊敬」を身に付けさせたいと考える傾向が弱い。仕事の選び方については、ベトナムやインドネシアでは安定性、マレーシアはお金を重視する傾向にあり、一方でタイは他国

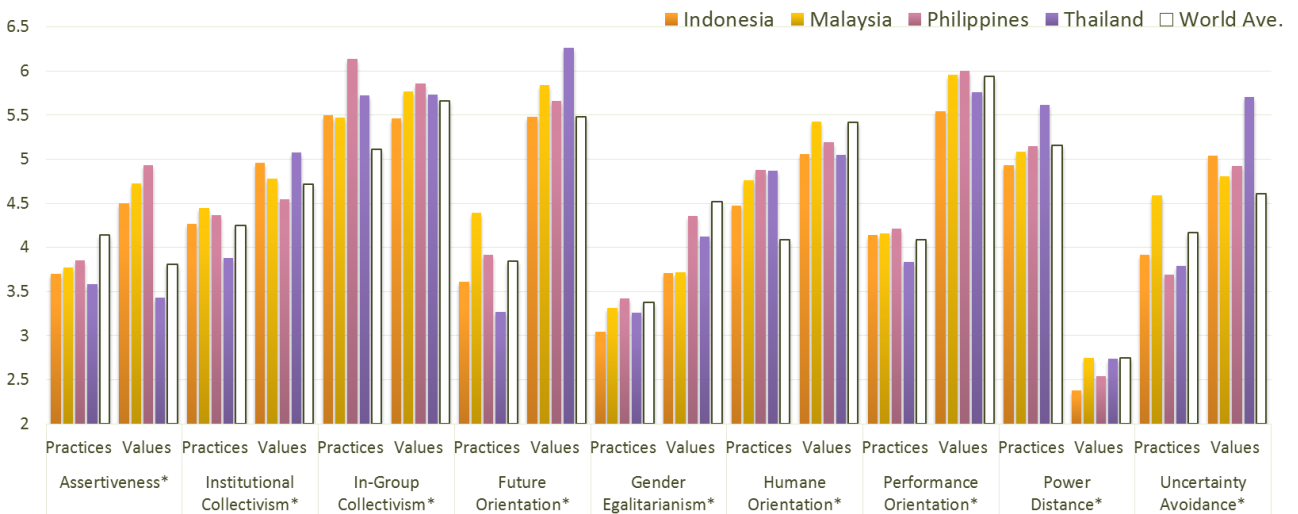


図-2 規範的価値観とに関するGLOBE指標

より名誉を求めない傾向があった。

また、WVSデータをもとに、家族、友達、休暇、政治、仕事、宗教の各項目について「重要である」と答えた割合を変数とした際の主成分分析を行った結果が図-3であり、このときの第1主成分は家族、宗教、仕事等（いわゆる対外的な属性）を重視する軸、第2主成分は余暇、友人といったもの（いわゆるプライベート）を重視する軸であった。ベトナムを除く東南アジア諸国は第1主成分が正值で第2主成分が0に近い値となっている。よって、東南アジアでは、全体的に家族、宗教、仕事といった伝統的なものの価値観が強い傾向があるものと考えられる。

これらのことから、他者への配慮より個人主義的な強さを求める、生活レベルを向上させることへの憧れがあると言え、自動車がステータスという感覚があったとしたら、お金さえあれば簡単に自動車利用に流れる可能性があるといえる。その反面、リスク回避能力への憧れも見られることから、信頼のおけるものに対する評価は高いと考えられ、公共交通の普及に際してはその価値として信頼を推す可能性があり得る。ただし、タイのように他の東南アジア各国とは異なる価値観を持つ国もあることから、地域別により詳細に見る必要があるといえる。

4. 東南アジアにおける価値観と生活水準との関連性

本章では、表-1で示した価値観と、生活水準をあらわす統計データの相関の傾向を考察することによって、生活水準とかわる価値観に関して、東南アジア特有の傾向を抽出した。

(1) 東南アジアとその他の国々の「価値観データ」と「生活水準データ」の関係の比較

アジアバロメーターのデータと生活水準データの関係を、質問項目の傾向が近いWVSと比較することで、東南アジア地域特有の傾向の把握を試みた。すなわち、アジアバロメーター×生活水準データの相関と、WVS×生活水準データの相関を比較し、その傾向が異なるものを抽出した。比較対象とする質問項目の一覧を表-2に示す。サンプルとした国数は、アジアバロメーターが10（ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム）、WVSが47~57（質問項目によって異なる）である。

その結果、

■ 東南アジアでは『家族と一緒にいることが重要』と考える指標が高いほど、経済競争力（HDIとの相関R=

表-2 WVSとアジアバロメータで共通する質問内容

アジア	WVS	質問内容
Q3(a)	V109	環境の生活への影響度>大気汚染
Q3(b)	V108	環境の生活への影響度>水質汚染
Q4	V10	幸せであるか
Q7(5)	V82	犯罪のない安全な暮らしが重要である
Q7(10)	V4	家族と一緒にいることが重要である
Q7(12)	V8	仕事が重要である
Q7(14)	V6	趣味を楽しむことは重要である
Q7(17)	V85, V119	競争に勝つことは重要である
Q7(18)	V80	自分らしさを活かすことは重要である
Q7(20)	V9	宗教は重要である
Q9	V23	多くの人は信頼できるものである
Q16	V209	自国人であることを誇りに思う
Q17-1	V212	自分を地域の一員と認識している
Q26(a)	V138	中央政府を信用している
Q26(c)	V132	軍隊を信用している
Q26(e)	V136	警察を信用している
Q26(f)	V140	国会を信用している
Q26(g)	V139	政党を信用している
Q26(j)	V142	大企業を信用している
Q26(l)	V135	労働組合を信用している
Q26(m)	V133	マスメディアを信用している(新聞)
	V134	マスメディアを信用している(テレビ)
Q26(p)	V147	国際連合を信用している
Q28(a)	V105	環境に対する支出を増やすべきである
Q40	V12	子どもに身につけてほしい資質:独立心
	V18	子どもに身につけてほしい資質:決意・がんばり
	V19	子どもに身につけてほしい資質:宗教心
	V21	子どもに身につけてほしい資質:従順さ
Q44	V192	神の存在は重要なものか

0.79、一人あたりGDPとの相関R=0.78)や健康面(健康に関わる教育との相関R=0.72)、情報技術面(インターネット使用率との相関R=0.81)の指標が高く、祝祭日数との間には負の相関が見られた(R=-0.75)のに対し、その他の国々ではその傾向は出なかった。祝祭日が少ない国やHDIやGDPが高い国の方が労働時間が長く、結果として教育やインターネット使用率等の文化面の水準も高くなると考えると、そのような国の方が限られた休日の時間を家族と過ごすことに重きを置く傾向にあるのではないかと推察される。

■ 東南アジアでは『環境(水質汚染、大気汚染)が生活へ及ぼす影響が大きい』と考える指標と、経済競争力(出稼ぎによる収入との相関R=0.78)や森林地帯の変化(R=0.79)データとの間に正の相関がみられたが、その他の国々ではこの傾向は見られなかった。出稼ぎに出られる程度の経済力のある国、実際に森林地帯に変化(開発と考えられる)が起きている国では、実際に環境に変化が起きていて、それが生活に及ぼす影響を目の当たりにしているものと推察される。

■ 東南アジアでは『多くの人は信頼できる』と考える指

標が高いほど、経済発展（インフラ整備との相関 $R=0.78$ ）、情報技術（ブロードバンド契約率との相関 $R=0.71$ ）に関わる指標が高い傾向が見られたが、その他の国々ではそのような傾向は見られなかった。情報が入りやすい、アクセスしやすい環境にあると、周囲への信頼が強く、その情報を信じやすい傾向があるといえることができる。

■ 東南アジアでは『中央政府を信じる』と考える指標が高いほど、経済指標（市場規模との相関 $R=0.83$ ）、環境指標（ひとりあたりの CO_2 排出量との相関 $R=0.73$ ）、情報技術指標（理工系大学卒業者数との相関 $R=0.89$ ）が高く、健康指標（5歳以下の低体重児の割合との相関 $R=0.97$ ）が低い傾向が見られたが、その他の国々ではそのような傾向は見られなかった。また、同様の傾向は、『軍隊を信用している』『警察を信用している』『国会（政治）を信用している』と考える指標との間でも見られた。生活レベルが高い国の方が政府や国家を信用する傾向にあるといえることができる。

■ 東南アジアでは『環境に対する支出を増やすべきである』と考える指標と、インフラ整備指標（道路の舗装率との相関 $R=0.81$ ）、経済指標（経済市場成長率との相関 $R=0.83$ ）、教育指標（高等教育との相関 $R=0.85$ ）、情報技術指標（ブロードバンド契約率との相関 $R=-0.88$ ）の間に負の相関が見られ、祝祭日数と正の相関が見られた（ $R=0.95$ ）。アジアバロメーターでは、支出を増やすべきかとの質問項目に、「環境」「健康・医療」「警察・法の執行」「教育」「軍事・防衛」「高齢者の年金」「失業手当」「公共交通機関・電気通信の基盤整備」「文化・芸術」「女性の社会的地位の向上」を設けており、ここでの「環境」にはインフラ整備や教育等は考慮されない。にもかかわらず、インフラ整備や経済、教育レベルが低い国のほうが環境整備に支出すべきと考えている傾向が得られたことになる。図-3に示すように、他の項目と比較して環境への支出を優先させるべきと認識しているわけではないが、経済的に優れていなくても環境に関心を持っている可能性が示唆される結果といえる。

以上のことから、生活水準と関わりがあると考えられる価値観から、経済状況によらず環境への関心はある程度持っている可能性があることがわかり、経済状況がある程度良い地域であれば、身近な問題として環境を認識させつつ、信頼されるメディアから環境志向を発信することでその意識を高められる可能性があること、休日に家族とともに過ごす時間の価値を高められるような設備にはニーズがあると推察される結果となった。

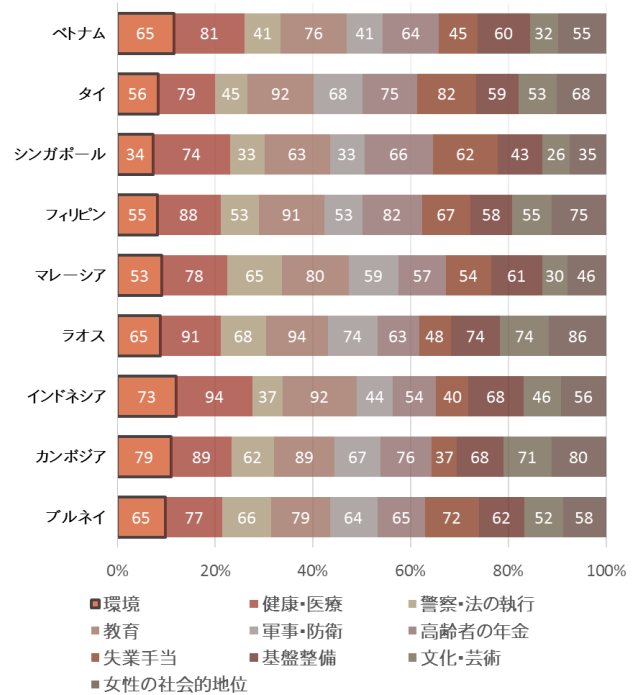


図-4 アジアバロメーターにおける支出を増やすべきと考える指標

(2) 「価値観データ」1変数と「生活水準データ」1変数の間の特徴的な分布を持つ組み合わせの抽出とその比較

Hofstede指標、GLOBE指標、WVSの3種類の価値観データによる1変数と生活水準・交通状況データの1変数について、2変数間での関係を『東南アジア』と『その他の国』の2クラスにサンプルを分けて分析を行った。指標として用いたのは以下の5つである。

- ・分散共分散行列の同等性の検定
- ・重心位置
- ・フィッシャーの判別基準（級間分散共分散行列と級内分散共分散行列の比）
- ・分散最大軸同士の角度
- ・情報量（分散最大軸をX'軸、それに直交する軸をY'軸

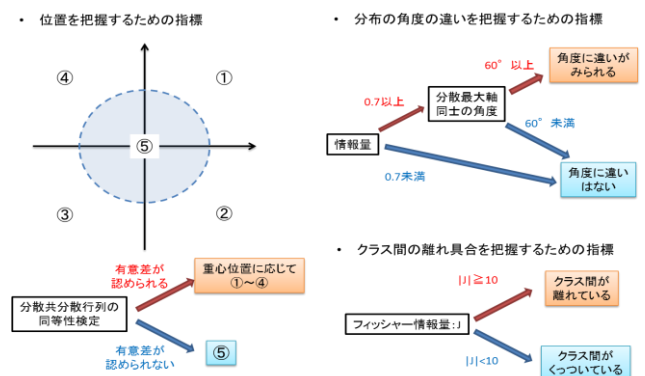


図-5 変数の散らばりを分類する指標と分類方法

表-3 分類の定義と抽出する分布傾向およびその組み合わせ数

分類	組み合わせ数	位置指標	クラス間距離	分布角度	抽出対象
A	183	①~④	近い	違いあり	分布の位置はほぼ一緒だが、両クラス間の分布傾向の角度に違いがみられる
B1	110	①	離れている	違い無し	東南アジアのサンプルの分布の位置が『その他の国』クラスから外れている
B2	3	②			
B3	74	③			
B4	8	④			
C1	1	①	離れている	違いあり	東南アジアサンプルの分布位置が『その他の国』クラスから外れており、両クラス間の分布傾向の角度にも違いがみられる
C2	0	②			
C3	3	③			
C4	0	④			

とした際に、X'軸方向の分散とY'軸方向の分散の和に対するX'軸方向の分散の値)

本分析で用いた東南アジアのサンプル国がマレーシア、インドネシア、フィリピン、タイの4カ国だけであり、東南アジアの分布が他の国と異なると断言するには少なすぎるが、結果としては分類A（分布の位置はほぼ一緒だが、両クラス間の分布傾向の角度に違いがみられる）が約半数となる結果となった。

a) 分類B1

この分類は、「東南アジアのサンプルの分布の位置が『その他の国』クラスから外れている」ものであり、具体的には以下の傾向を見ることができた。

- ◆「自己主張」に関する指標と「健康部門への公共支出額」の関係：東南アジアのサンプルからは、他の国と比較して健康部門への支出が少なく、自己主張が弱い現状が窺える。これらは関連があるというより、この2項目が東南アジアのサンプル国の強い特徴であることが影響したものと考えられる。
- ◆「貧困問題よりも自国の問題解決に対する意識が強い」という価値観と「技術面でのレディネス指標」の関係：東南アジアサンプルの技術面でのレディネス指標自体は低く、自国の問題解決に対する意識が強いことから、自国の技術が低いながらもゆえに抱える多数の課題を解決することが大きな課題であると考えていることがわかる。
- ◆「自国に対する誇り」と「健康・初等教育指標」の関係：東南アジアサンプルでは自国に対する誇りがかなり強い一方で、健康・初等教育の指標はあまり高くない傾向がみられた。このことから、東南アジアの国々に住む人々は実際の生活環境は他の国と比べ決して優れているものではないが、その環境におおむね満足しているのではないかと考えられる。

b) 分類B3

この分類も、「東南アジアのサンプルの分布の位置が『その他の国』クラスから外れている」ものであり、具

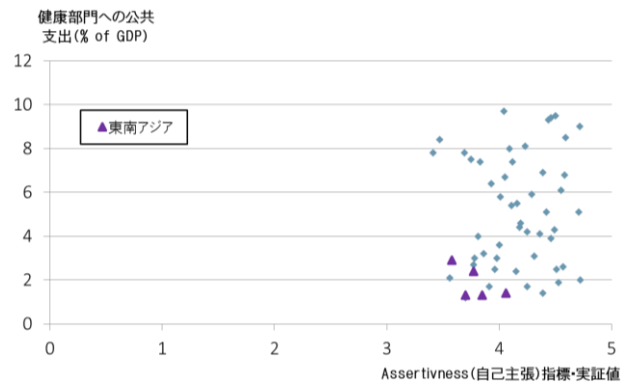


図-6 「自己主張」指標と「健康部門への公共支出」の関係

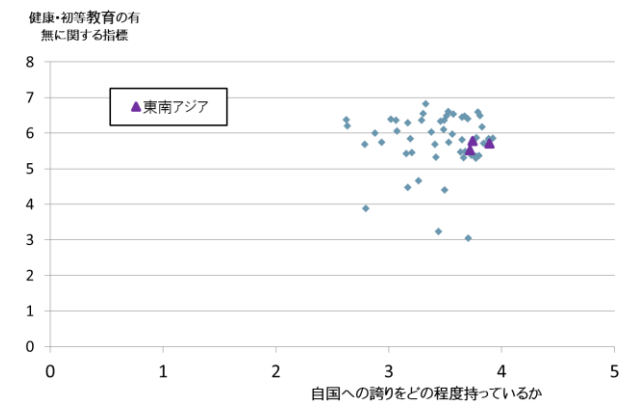


図-7 「自国への誇り」指標と「初等教育の有無」の関係

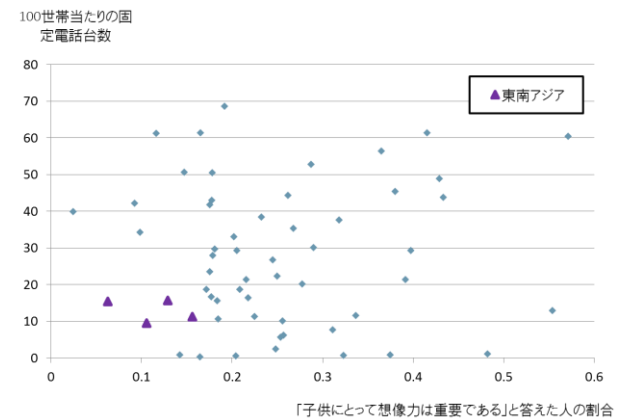


図-8 「子どもにとって想像力は重要」という価値観と固定電話台数の関係

体的には以下の傾向を見ることができた。

- ◆「固定電話の台数」と「子供にとって想像力が重要である」という価値観の関係：東南アジアのサンプルは固定電話の台数、「子供にとって想像力が重要である」という価値観ともに低い値に集まっている。東南アジアでは生活水準が低いために考え方が現実的になっているのか、固定電話よりも先に携帯電話が普及し、(他の分析でも技術面での憧れが強い傾向もみられたように) 想像力よりもテクノロジーに重きを置いてい

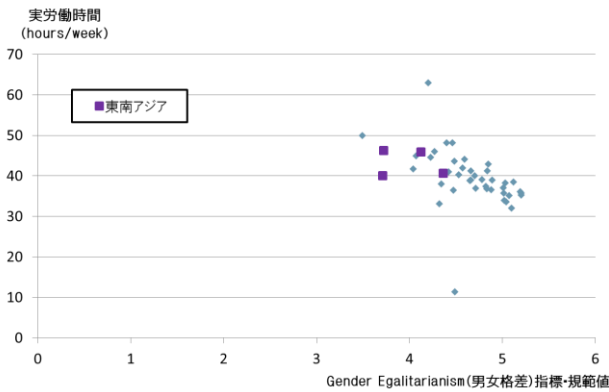


図-9 男女格差指標・規範値と実労働時間の関係性

るのか、あるいは、Face-to Faceの関わりが多く、目の前にあるものへの価値を高く見出ししているかのいずれかと推察される。

c) 分類C3

この分類は、「東南アジアサンプルの分布位置が『その他の国』クラスから外れており、両クラス間の分布傾向の角度にも違いがみられる」ものであり、具体的には以下の傾向を見ることができた。

◆「男女格差指標」の規範値と「実労働時間」の関係：
全体的には負の相関が見られるが、東南アジアのサンプルは、労働時間が多く、男女格差の改善についてはそれほど強い意識を持っていない傾向が見られた。第3章で、「男女平等が民主主義的だ」と考える価値観があったが、ここでの指標は規範値（理想として持つべき価値観）であり、「民主主義的だが別にそうあるべきとは思っていない」という感覚があるのではないと思われる。

5. 結論

本研究では、本研究では東南アジアの発展途上国を対象とした既存の調査や統計を組み合わせ、東南アジア特有の価値観・意識と生活行動を抽出することを試みた。その結果、以下のような知見を得た。

- ・集団主義や他者への思いやりが高い傾向が見られた反面、理想として、自己主張、リスク回避を掲げる傾向がある。
- ・「安定した経済」を最も重視し、「独立や節約」を子供に身に付けさせたいと考える傾向が強いことがわかった。逆に、「お金よりアイデアが大事」という価値観や、子供に「他者への尊敬」を身に付けさせたいと考える傾向が弱い。
- ・全体的に家族、宗教、仕事といった伝統的なものの価値観が強い傾向がある。
- ・リスク回避能力への憧れも見られ、信頼のおけるもの

に対しての評価は高い。

- ・祝祭日が少ない国や労働時間が長い国では、限られた休日の時間を家族と過ごすことに重きを置く傾向にあるのではないかと推察される。
- ・ある程度の経済力のある国、実際に森林地帯の開発が起きている国では、それが生活に及ぼす影響を目の当たりにしているものと推察される。
- ・情報が入りやすい、アクセスしやすい環境にあると、周囲への信頼が強く、その情報を信じやすい傾向がある。
- ・生活レベルが高い国の方が政府や国家を信用する傾向にある。
- ・他の項目と比較して環境への支出を優先させるべきと認識しているわけではないが、経済的に優れていなくても環境に関心を持っている可能性がある。
- ・自国の技術が低いがゆえに抱える多数の課題を解決することが大きな課題であると考えている。
- ・東南アジアの国々に住む人々は実際の生活環境は他の国と比べ決して優れているものではないが、その環境におおむね満足しているのではないかと考えられる。
- ・「男女平等の考え方は民主主義的だが、必ずしもそうあるべきとは思っていない」という感覚があるのではないと思われる。

以上のことから、生活水準と関わりがあると考えられる価値観から、経済状況によらず環境への関心はある程度持っていること、テクノロジーへの憧れが強いことがわかり、経済状況がある程度良い地域であれば、身近な問題として環境を認識させつつ、信頼されるメディアから環境志向を発信することでその意識を高められる可能性があること、また、先端的なイメージやテクノロジーと結びつけることで価値が高まると考えられ、用途として休日に家族とともに過ごす時間の価値を高められるような設備にはニーズがあると推察される結果となった。

今後の課題として、これらの生活行動や価値観を公共交通をはじめとした交通行動に結びつけ、東南アジアでの公共交通導入の可能性を探るためのより詳細な分析を行なうことが挙げられる。

参考文献

- 1) 例えば、山岸陽介、寺部慎太郎、水口昌彦：利用者のライフスタイルと都市間交通機関選択行動の関係分析、土木計画学研究・講演集、Vol.27、II-4、2003.6
- 2) 例えば、長嶋直樹：生活者の価値観変化と消費行動への影響、富士通総研 研究レポート No.363、2010
- 3) 水野谷武志：生活時間統計による国際比較研究の到達点と課題、経済志林、Vol.76 No.4、pp.81-98、2009
- 4) Hofstede, G. et.al : Cultures and Organizations : Software

of the mind , 3rd edition, McGraw-Hill USA, 2010

7) アジアバロメーター2004

5) House, R.J. et.al : Culture, Leadership, and Organizations,
The Globe Study of 62 Societies, Thousand Oaks:
Sage ,2004

(2014. 8. 1 受付)

6) Jaime Díez Medrano : WVS 2005 CODEBOOK, World
Values Study Group, 2009

STUDY OF EFFECTS ON DAILY ACTIVITIES CAUSED BY INDIVIDUAL
VALUES IN DEVELOPING COUNTRIES IN SOUTHEAST ASIA

Ryo YAMADA, Mio SUZUKI and Tetsuo YAI